

- 1 . 祭司たちよ。今、この命令があなたがたに下される。
- 2 . もし、あなたがたが聞き入れず、
もし、わたしの名に栄光を帰することを心に留めないなら、・・万軍の主は仰せられる・・
わたしは、あなたがたの中にのろいを送り、あなたがたへの祝福をのろいに変える。
もう、それをのろいに変えている。
あなたがたが、これを心に留めないからだ。
- 3 . 見よ。わたしは、あなたがたの子孫を責め、あなたがたの顔に糞をまき散らす。
あなたがたの祭りの糞を。あなたがたはそれとともに投げ捨てられる。
- 4 . このとき、あなたがたは、
わたしが、レビとのわたしの契約を保つために、あなたがたにこの命令を送ったことを知ろう。
・・万軍の主は仰せられる・・
- 5 . わたしの彼との契約は、いのちと平和であって、わたしは、それらを彼に与えた。
それは恐れであったので、彼は、わたしを恐れ、わたしの名の前におののいた。
- 6 . 彼の口には真理の教えがあり、彼のくちびるには不正がなかった。
平和と公正のうちに、彼はわたしとともに歩み、多くの者を罪から立ち返らせた。
- 7 . 祭司のくちびるは知識を守り、人々は彼の口から教えを求めろ。
彼は万軍の主の使いであるからだ。
- 8 . しかし、あなたがたは道からはずれ、多くの者を教えによってつまづかせ、レビとの契約をそこなった。
・・万軍の主は仰せられる・・
- 9 . わたしもまた、あなたがたを、すべての民にさげすまれ、軽んじられる者とする。
あなたがたがわたしの道を守らず、えこひいきをして教えたからだ。」
- 10 . 私たちはみな、ただひとりの父を持っているではないか。
ただひとりの神が、私たちを創造したではないか。
なぜ私たちは、互いに裏切り合い、私たちの先祖の契約を汚すのか。
- 11 . ユダは裏切り、イスラエルとエルサレムの中では忌まわしいことが行なわれている。
まことにユダは、主の愛された主の聖所を汚し、外国の神の娘をめとった。
- 12 . どうか主が、このようなことをする者を、
たといその者が万軍の主にささげ物をささげても、ひとり残らずヤコブの天幕から断ってくださるように。
- 13 . あなたがたはもう一つのことをしている。
あなたがたは、涙と、悲鳴と、嘆きで主の祭壇をおおっている。
主がもうささげ物を顧みず、あなたがたの手から、それを喜んで受け取らないからだ。
- 14 . 「なぜなのか。」とあなたがたは言う。
それは主が、あなたとあなたの若い時の妻との証人であり、あなたがその妻を裏切ったからだ。
彼女はあなたの伴侶であり、あなたの契約の妻であるのに。
- 15 . 神は人を一体に造られたのではないか。
彼には、霊の残りがあつた。
その一体の人は何を求めるのか。
神の子孫ではないか。

あなたがたは、あなたがたの霊に注意せよ。

あなたの若い時の妻を裏切ってはならない。

16. 「わたしは、離婚を憎む。」とイスラエルの神、主は仰せられる。

「わたしは、暴力でその着物をおおう。」と万軍の主は仰せられる。

あなたがたは、あなたがたの霊に注意せよ。裏切ってはならない。

17. あなたがたは、あなたがたのことばで主を煩わした。

しかし、あなたがたは言う。

「どのようにして、私たちは煩わしたのか。」

「悪を行なう者もみな主の心になんていっている。

主は彼らを喜ばれる。

さばきの神はどこにいるのか。」とあなたがたは言っているのだ。

説教

神さまをばかにして蔑み、「(カビの生えた余り物の)汚れたパン」、「盲目の獣」、「足のなえたものや病気のもの」、「損傷のあるの」など、イスラエルの民たちが持って来るいい加減ないけにえをそのままささげている祭司に対し、神さまは第一章で怒りを爆発させます。そして、地上の支配者である総督も喜ばないようなカビだらけのパンをささげて自己満足している彼らの礼拝に対し、「わたしは、あなたがたを喜ばない。～万軍の主は仰せられる。～わたしは、あなたがたの手からのささげ物を受け入れない」(1:7,8,14)、これ以上「汚れた」礼拝をささげぬよう神殿の「戸を閉じる人は、誰かいないのか」(1:10)、「ずるい者は呪われる」とまで言われました(1:14)。

続く第2章でも、神さまは「祭司たちよ！」と祭司を厳しく断罪なさいます(2:1)。そこでは、「もし」、祭司が預言者の警告を無視して「聞き入れず」、「心に留めないなら」、「わたしは、あなたがたの中にのろいを送り、あなたがたへの祝福を呪いに変える」と言われます(2)。「のろい」は神さまの戒めに従わない者に対して下される神さまの懲らしめのことで、その一覽が申命記28章15節から68節まで実に長々と教えられました。本来は神さまの「祝福」を人々にもたらず器として立てられた祭司でしたが、今や人々に神のことばを教えることなく、神の「祝福」どころか神の「呪い」をもたらず者に成り下がってしまった彼らに対し、神さまはそれに相応しく「のろい」を下すと宣言なさいます。そして、「見よ。わたしは、あなたがたの子孫を責め、あなたがたの顔に糞をまき散らす」と言われるのです(3)。言うまでもありませんが、礼拝の際にいけにえとなる動物の「糞」は、何の役にも立たず、不要な汚物として嫌悪されて捨てられました。その「糞」を神さまは「汚れた」祭司たちの顔にぶっかけて、その「糞」と一緒に「投げ捨てる」と最大級の嫌悪を表明なさるのでした。

本来、祭司は人々に「いのちと平和」をもたらず使命を帯びていました。それで、彼らはイスラエルの誰よりも先がけて(いけにえの血により神との契約に入れられて)「いのちと平和」にあずかりました(5)。そして、罪に死んでいる人々のためにいけにえをささげて罪を贖い、彼らを神との交わりに入れて「いのちと平和」を回復させるのが祭司のつとめです。祭司は「万軍の主の使い」です(7)。祭司が神さまを「畏れ」、「平和と公正のうちに」：神と「共に歩み」、人々に「真理の教え (tm,a/ tr:ÛAT : 真理の律法)」を教えた時には「多くの者を罪から立ち返らせた」のです(5-7)。でも、今や祭司らは「わたしの道を守らず」、「道から外れ」、「えこひいきをして教え」、「多くの者を教えによってつまずかせ」て、イスラエルの人々を滅びに追いやっています(8-9)。「えこひいきをして教え」の直訳は「律法に於いて顔々をえこひいきする」です。祭司は、神のことばをまっすぐ教えて人々を罪から立ち返らせなければならないのに、人の顔色を見て「えこひいき」し

て教えました。その結果、人々は神の律法を正しく教えられないので、自分勝手に生きました。神さまを軽く見て侮り、「(カビの生えた余り物の)汚れたパン」、「盲目の獣」、「足のなえたものや病気のもの」といった価値のないいり加減なものを神さまにささげてそれでいいやと自己満足するようになっていったのです。それで、その礼拝はどんなにささげても神さまの喜ばないものとなりました。人々にいのちをもたらさない、意味のない、「呪われた」、死んだ礼拝となってしまいました。

ここに祭司の最も重要な役割があります。祭司は人の顔色を見ることなく、ただ神さまだけを畏れて人々を教えてこそ、はじめて人々を生かすことができます。人々を罪から立ち返らせて、人々にいのちをもたらすことができます。祭司は神さまを代表して罪人に真理の律法を教えるのです。人を代表して人に喜ばれるよう人の顔色を見て彼らを「えこひいき」して教えるのではありません。勿論、罪人になり代わって罪人のために彼らの身代わりとなるいけにえをささげることに於いては人々を代表します。でも、そうであればあるほど、人々を代表して神さまにささげるいけにえと礼拝は、どういうささげ物と礼拝を神さまがお喜びになるのか(つまり律法)を祭司がきちんと人々に教えて指導しなければなりません。そうでなければ、礼拝行為自体が汚れて神さまに忌み嫌われ、罪に死んでいる人々にいのちがもたらされていかなくなります。それで、神さまは、役立たずの祭司の顔に「糞」をぶっかけて、不要な祭司を投げ捨て、神さまが人々と祭司から「さげすまれ、軽んじられ」ているように、神さまもまた祭司を「すべての民にさげすまれ、軽んじられる者とする」と宣言なさいます。

それでは、祭司が人々にきちんと教えないために、その当時、どのようなことが起こっていたのでしょうか。人々はどのように生きていたのでしょうか。マラキは、2章10節以降で、二つのことを挙げています。一つは雑婚の問題です(10-12)。そして、もう一つは離婚の問題です(13-16)。雑婚というのは、イスラエル以外の国の人と結婚することです。政略結婚で外国の妻をめとったソロモンやアハブがそうであったように、異教の神々の風習が染みついている外国人と結婚すれば、彼らの拝んでいる神々までも持ち込まれるようになります。それで、偶像崇拜の危険性が増し加わるのです。それで、聖書は雑婚を厳しく禁じています(創世記6:1~3、24:2,3、34:14、出エジプト34:16、申命記7:3,4、ヨシヤ記23:12,13、列王記11:1-9、列王記16:30~33、エズラ9:10-14、ネヘミヤ13:25-27)。マラキは、雑婚を「外国の神の娘をめとる」と呼び、「先祖の契約を汚し」「主の聖所を汚す」、「裏切り」、「忌まわしいこと」と呼びます(10-11)。そして、雑婚者を「ひとり残らず...断ってくださるよう」に」と祈るのでした(12)。イスラエルの民が行っていた「もう一つの」罪は、離婚です。元来、神さまご自身が「証人」となって成立する婚姻関係は神聖な契約です(14)。「神が人を一体に造られた」夫婦の絆は、人が勝手に壊してはならないものです(15)。それなのに、イスラエルの民は、「契約の妻」である「伴侶」を裏切り、離婚しています(14)。そして、自分は伴侶との契約を破棄しておきながら、神さまに対しては、自分が神との契約に入られているはずなのに神さまが祈りに応えてくれないのは「なぜなのか」と「涙と、悲鳴と、嘆きで主の祭壇をおおって」い(13-14)たのです。つまり、自分の罪を全くわかっていなかったのです。これもすべて祭司が人々を教えないからでした。

これに対し、神さまは言われます。「わたしは離婚を憎む。」(16)そして、妻を離縁した者には、妻に対してなした無慈悲で強引で不法な「暴力」を報復し、それですっぱりと覆ってやる、とまで言われるのです。「いのちと平和」に満ちた人生ではなく、「死と暴虐」に満ちた、「死と暴虐」だらけの人生を報いてやる、と言われるのです。雑婚も離婚も身近な家庭の問題です。しかも、最も基本的かつ根本的な「夫婦」という契約関係に関わります。結局、神へのいり加減さが、この世の最も身近な人間関係にも露呈して、その結果、「いのちと平和」を失います。このような死と滅びの中にある世に、生けるまことの大祭司キリストは来られました。そして、「いのちと平和」をもたらししてくださいました。キリストは、罪深い私たちの罪を贖ってくださいました。そして、真理を教えて、「罪と滅び」に満ちた世に「いのちと平和」をもたらしされたのです。罪の故に死ぬしかない私たちの罪を贖って、無知な私たちに神さまのみこころ「律法」を教えてくださったのです。祭司が祭司として機能せずその役割を果たさないで、人々は無知の故に罪を犯して滅びと死の中にありました。人々は結局神さまを知りません。この当時、雑婚も離婚も、結局は人々が神さまを知らないからでした。それは、祭司が教えなかったからです。

それで、人々は神さまを知りません。17 節を見ると、人々は「さばきの神はどこにいるのか。」とっています。「悪を行なう者もみな主の心になつている。(罪を犯しても)主は彼らを喜ばれる」などと、全く酷いことまでっています。そして、罪を犯しました。

キリストは、このような罪人を救うために来られました。私たちの罪を贖って、彼らに永遠のいのちを与えました。そして、神と人を愛するよう、教えました。心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、神を愛するよう教えました。あなたの隣人を、あなた自身のように愛するよう教えました。のみならず、「新しい戒め」として、「わたしがあなたがたを愛したように、そのように、あなたがたも互いに愛し合」うよう教えました。つまり、神も神の愛も知らない弟子たちの所にイエスさまが来て、彼らに神の愛を余すところ無くあらわして、そのイエスさまに弟子たちが愛されたように、そのように互いに愛し合いなさいとイエスさまは言われたのです。

神の愛を知れとは、マラキが預言書の冒頭に言い放った言葉です。神の愛を知らないイスラエルの人々は、本当の神の愛を知らない故に神も人も愛することができないでいました。その彼らに対して、マラキは「わたしはあなたがたを愛している」との神のことばを伝えました。そして、神の愛を知らない彼らのために神ご自身が世に来ることを預言します。それがイエスキリストです。聖書が証言するように、神の愛はイエスキリストに於いて余すところ無く完全にあらわされました。キリストを通して完全にあらわされた神の愛を知って、そのように弟子たちが神と人を愛するようにと、イエスさまは言われたのです。こうして、イエスさまは、「いのちと平和」をもたらしてくださったのです。